

海外研修報告書

多摩美術大学 情報デザイン学科 情報デザインコース 矢野英樹

テーマ「情報活動を支える次世代デザインを対象とした、
アジアの視点を活かしたワークショップによるデザイン教育プログラム研究」

期間：2008年6月1日 - 2009年3月31日

研修先：国立雲林科技大学（台湾／雲林県）、清華大学美術学院（中国／北京）

1. 研修のねらい

デザインの国際教育研究プログラムづくりを目的として、アジア各国がもつデザイン実践のプロセスとデザイナー育成のプログラムを把握する。そして、共同的にそれぞれの社会文化価値を相互に尊重する仕組みを構築し、新たな教育研究プログラムを作るために、Learning by Doing（やってみてわかる）手法を用いることで、本当に使えるプログラムを研究開発する。このため、ワークショップを企画実践しながら、教育手法としてのプログラムを作り上げる。

2. 研修の背景と目的

(1) 「日本イメージ」をかたちづくるインタフェースとしてのデザイン

現在、わが国の多くの産業は、アジア諸国を縦貫する生産や流通の仕組みを形成し、同時に、その国や地域を対象に、製品・サービス・コンテンツなどの商品供を行っている。そこで、これらの「デザイン」が、直接にユーザと対峙する「表現・インタフェース」として機能し、社会文化的価値の表象として現地での「日本イメージ」を形成している。

(2) 社会文化の価値多様性をアジア全体の財に

アジアには各国地域を超えて共通する部分と、異なる部分をもつ社会文化的な価値観がある。この価値観と前述の商品デザインがかたちづくっているそれぞれの社会のイメージが渾然となり、例えばコピーのような商品をも通じ、豊かな表象の交換状況が生み出されている。そこで、重要な役割を担うことができるのは、すぐれた実績をもつ「日本デザイン」、つまり、20世紀後半をとおして発展した日本のデザイン活動の経験とそれを可能にしたデザイン教育である。その実績からは、すでに日本のデザイン教育は海外から何かを学ぶだけでなく、諸外国に教育を提供し、その過程を通じて自らの学びを地域全体の財とする役割を担うべきである。

(3) 「日本のデザイン教育」の牽引

アジア各国がもつデザイン実践のプロセスとデザイナー育成のプログラムを交換すること、そしてそこにある創造力を協働可能な仕組みに再編成する。具体的には、デザインを通じたお互いの多様性の理解と協働を促し、国際的な教育研究プログラムを確立するために、アジアの視点を活かした教育手法として体験的な理解を支えるワークショップ形式の授業を展開する。

3. 研修先と理由

(1) 雲林科技大工業設計系：日本に次いで発展していることと、アジアのデザイン教育現場としての実績がある。



南国の強い日差しと広大な敷地に立つ校舎



林聡明学校長にごあいさつ



ワークショップを指導した先生方と撮影。
写真中央が工業設計学科の楊学科長

(2) 清華大学美術学院：大きな発展が見込まれる中国におけるデザイン教育の拠点である。





美術学院の建物と自身の研究スペース



美術学院は広大な敷地の一角にある。

4. ワークショップと調査の実施

(1) 台湾（2008年6月1日 - 10月31日）

雲林科技大工業設計系の1年生（76名）演習プログラムに教員の一人として関わりながら、現地の教育手法とその成果を調査した。授業の担当教員の構成は、学科長である教授、准教授、講師からなる3名で、学生76名が一堂に入る大型制作教室にて、3教員が教室で巡回指導を行っている。尚、課題趣旨説明や全体に関わるアドバイス等は3人の教員が教壇に立ち、それぞれの持ち味を活かしつつ一年生全員に指導を行なう。そのうえで、教員ごとに担当学生25、6人が決っており、彼らを中心に個別指導を行なっている。この指導形式は複数教員による指導（チームティーチング）である。現在、日本でも積極的に採用されている指導方法であり、多摩美術大学においても同様に、いくつかの演習で採用している指導方法である。2008年度の情報デザインコースの授業では、遠藤講師・吉橋准教授・矢野の3名で担当している演習で実施していた形式である。この経験があるため、台湾での3教員の授業においてスムーズに調査や協働が実施できた。



(1)-1 特別講義

台湾では特別講義といくつかのワークショップの機会を得た。特別講義では、自身のデザインの考え方と実績を紹介した。その上で、多摩美術大学での教育事例の紹介と、デザインワークショップを行なった。





(1)-2 雲林科技大学工業設計系1年生の作品の講評会への参加と指導



デザインの基礎プログラム。めがねのデザイン。左中間講評会、右最終講評会の様子。

(1)-3 大学院ガイダンスの様子



様々な教育カリキュラムの現場にかかわった。

(1)-4 カーデザインワークショップ／7月7日-7月13日



7月から、集中ワークショップとして「2008 Car Design Workshop」カーデザインワークショップが行なわれた。日本から講師を招聘して行なう特別プログラムである。これは、開催前の2008年の2月から企画と準備を開始し、4月には学生の選抜を行なっている。とても、長い時間をかけて準備をしていた教育プログラムである。本プログラムの企画と実施とりまとめは、楊静主任、陳鵬仁講師の二人である。なお、日本から招聘された講師は実施5日前から訪台しており、学生と出会う前に準備期間を設けて実施に備えていた。

テーマ：ミニマムカー、救急車、タクシー、スポーツカー、パーソナルカー

ワークショップの内容：

アイデア展開方法、3DCADの講習、グループワークのトレーニングが行なわれた。

招聘された講師は以下の二名。

- ・筑波大学 蓮見孝教授
- ・Studio GOKEIAN 代表山田泰里氏

山田泰里氏は、元日産のモデラーで、日本はもとより清華大学にもスケールモデリングセミナーを実施したことがある。これまで、台湾や中国各地の大学や企業の現場で、カーデザインのセミナーを行なっている。



蓮見教授



山田講師

参加学生は32名。2、3年生と大学院1年生の中から優秀学生を選抜して実施した。参加者は8組に分かれて、グループごとに調査やアイデア展開等を行ない、各自で最終的なデザイン提案をまとめた。



台湾でも日本同様に様々なワークショップが実践されている。現地滞在中に、このような大きなワークショッププログラムの準備課程から終了後のフォローまですべての段階に関わることができ、プロセスを通じて大きな収穫を得た。ワークショップを比較的に研究する上で幸運に恵まれた。

(1)-5 物々交換ワークショップ(価値について考える)/10月15日、19日、27日



10月15日、工業デザインを学ぶ1年生を対象に物々交換ワークショップを行なった。これは、矢野が日本で2002年から価値の多様性や価値観について考える為に行なっているオリジナルのワークショップである。

10月19日には、大学院生を対象に同様のワークショップを行ない、10月27日には、工業設計院という研究センターの社会人を対象として実施をした。世代や、環境ごとの特徴あるアイテムが交換され、さまざまな価値についての考えを深めることができた。

(2)北京 (2008年10月7日 - 2009年3月31日)



清華大学美術学院の王明旨教授の協力により、滞在期間中に行なうワークショップの目的や方法などの研究プロジェクト打合せを情報デザイン学科長、工業デザイン学科の教授と実施した。そこで、ワークショップ参加者の学科や学年による偏りを無くすため、幅広くの参加学生を募ることにし、情報、工業、グラフィックの各デザイン学科から学生の参加をさせることにした。

(2)-1 情報デザイン学科の2年生作品講評会 (12月25日)



インフォメーショングラフィックス演習の最終講評会。学生は情報のグラフ表現、空間表現、そして、動的表現について学んでいる。最終講評会では、各自が制作した3種のインフォメーショングラフィックスをプレゼンテーションした。動的表現のテーマは全員が同一で、「清華大学の学生的一天」。

(2)-2 特別講義：2009年3月5日(木) 15:30 - 17:00



講義内容：自身のデザイン事例紹介とワークショップ

1. デザイン事例の紹介

2. コンペ受賞作のデザイン解説
3. 来場者全員参加のワークショップ
4. 次回予定の物々交換ワークショップのレクチャー

参加者：情報デザイン学科(1年生10名), プロダクトデザイン学科(3年生9名、大学院生1名), グラフィックデザイン学科(3年生10名), 工業デザイン学科 王明旨教授、グラフィックデザイン学科 陳南副教授、情報デザイン学科 吳琮講師 他。



身体を使ったワークショッププログラムの様子

(2)-3 物々交換ワークショップ (価値について考える)

2009年3月9日(月) 9:00 - 12:00



参加者：情報デザイン学科(1年生10名), プロダクトデザイン学科(3年生9名、大学院生1名), グラフィックデザイン学科(3年生10名), 工業デザイン学科 王明旨教授, グラフィックデザイン学科 陳南副教授, 情報デザイン学科 吳琮講師 他。

参加者の持参アイテムは、多種多様である。北京の学生も台湾と同じような品揃えであることから、参加者の生活においては既に十分なモノがあると感じた。しかし、交換アイテムとして、例えば「按摩」や「昼食お届け」などのサービスについては、4日前の事前レクチャーのときに十分な時間をかけて解説をしたのかかわ

らず、参加者からは全く提供されなかった。サービスを物々交換の対象として誰も持って来ないということは、日本や台湾でのワークショップと比べると特徴的な出来事である。これは、中国社会でのサービスに対する価値観を少なからず投影していると感じた。実際、街に出ると近代的なビルや商店 レストランが並んでいるが、そこで提供されているサービスは諸外国と比べて、けっして良いとはいえないところがある。この生活環境の中においては、自身が物々交換の対象として、サービスを提供したり受け取ったりすることより、現実存在するモノを対象として交換することに意識が向くのであろう。このことから、ハードウェアとしてのモノの充実に対して、ソフトウェアとしてのサービスやモノゴトの使い方などは、現段階ではデザイン対象としてまだ成熟していないようであると感じた。

***持参物の例**

- イ) 身近な道具 (文具、工具、自転車、カメラ)
- ロ) 身近な食べ物
- ハ) コレクション (現在も興味あり)
- ニ) コレクション (過去に興味あり)
- ホ) 記念品
- ヘ) 本 (興味有り、興味無し) 等々

過去に、日本で行なったワークショップや台湾でのワークショップとも比較したうえで、中国ではワークショップの後、参加者が作成した交換記録用紙を一枚ずつ見て行くと、物々交換をした理由が「好きだから」という回答がとても多かった。そこで、好きな物に対して好きな理由を尋ねると、答えに窮する場面が多いのである。あなたの「好きだから」の感じは「どんな感じの好きだから」なのか、それぞれの交換アイテムはまったく違うし、交換した人物も違うのだから好きな理由はそれぞれあるはずである。対象物の「どこがどう好きなのか」他の人と同じ「好きだから」で交換を決めたのだろうか？そのほかの理由は無いのだろうか？ワークショップの短い時間で、この物々交換記録用紙にすべてを書くことが出来なかつただけかもしれない。けれど、そのほかの理由や感じをあらためて問われなければ、「好きだから」という理由で、モノゴトに対して満足しているようにも感じられた。

この特徴的な出来事から、相手の提供するモノゴトや状況から、自分がどう感じてその答えを導き出したのか、そこを深く掘り下げて、言葉にするデザイン教育やトレーニングが少ないように感じられた。反対に日本のデザイン教育はそこをじっくりと行なっているということに気づかされた。

(2)-4 参加者インタビュー

デザインの授業としてなぜこのようなことをやっているのか？等々、なにかしらの授業を行うにはねらいがあることを示しながら、ワークショップの参加者に後日インタビューを行なった。

***質問表からの抜粋**

- (ア)消費の体験について

- a) 普段どういうことにお金を使っているのか？
- b) 普段使っていて、節約するとしたらどういうところを節約している。
- c) 生活の為に必要なのはなに？
- d) 自分でやるもの？料理、食事が多いのか？

(イ) ワークショップに参加してどう感じていますか？

(ウ) ワークショップのねらいは「価値について考える」であるが、価値についてどう感じていますか？

(エ) なぜデザインの授業でこのようなことをやると思いますか？

(オ) この授業にはねらいがあるのですが、美術学院の授業や課題でねらいを考えたり、意識したことはありますか？また、ねらいが明確なモノはありましたか？今までの学校生活でもありますか？

(カ) 今回の WS で、参加者の様子から「ねらい（価値について考える）」がピンと来ていない感じを受けましたが、どのような感じで参加していましたか？

(キ) ワークショップ中に価値を意識したり考えたりしましたか？したとすれば、どこで価値について考えましたか？

(ク) 交換アイテムとしてあったのはモノばかりで、サービスが全くなかったのですが、どう思いますか？

(ケ) 例えばアイテムを事前に用意する時、サービスに交換可能な価値を見いだせなかったのでしょうか？

等々

(2)-5 物々交換ワークショップ（価値について考える）

2009年3月13日（月）13：30-16：00



清華大学美術学院以外の文学部でも、物々交換のワークショップを実施した。彼らがワークショップに持って来たアイテムをつぶさに見ると、参加者それぞれの身近なモノや興味がある或は過去に興味があったモノで、何らかの記念品、特技など、いずれも自身の生活と関係があるアイテムであった。サービスに関しては、美術学院でのワークショップでは誰も持って来ることは無かったが、既に2年目も終わりに近づいている気心の知れたこのクラスでは、いくつかのサービスが提示された。これはお互いをよく知っていることから、交換アイテムとして持ち込むことができたということが、参加者インタビューで明らかになった。

(2)-6 国際講評会 (CO-CORE)

滞在先である清華大学美術学院（北京）において、多摩美術大学の「異文化相互批評が可能にする高度人材育成」教育プログラムの国際講評会実施に関して、現地にて学生作品の講評や、作品搬入に関する関税諸手続きを行なった。



国際講評会は、11月25日から12月1日にかけて、日本から6名の教員と28名の大学院生と作品が清華大学美術学院を訪れて開催をした。日本から届いた作品の領域は日本画、油画、版画、彫刻、グラフィックデザイン、プロダクトデザインという多岐にわたる作品である。これに対して、清華大学美術学院もほぼ同数の大学院の作品（油画、彫刻、情報デザイン、グラフィックデザイン、工業デザイン）を準備し、多摩美術大学の作品と清華大学美術学院の作品を一同にギャラリーに展示し、合同講評会を行なった。



この新しい試みである講評会は、作品領域を分けず横断的に行なう合同講評と、国境を超えて異文化における相互批評を特徴としている。この作品領域を分けず学科横断的に行なう合同講評は、私の聞いた限りでは中国において行なわれたことがないということである。加えて、自身が参観やヒアリングをした授業等の様子からは、中国の大学における講評会は専攻領域によっても多少の違いがあるが、自分の作品に対して教員からの批評を受ける場という傾向が強かった。このため、今回の

中国側学生にとって自分の作品批評以外に、同級生の批評やコメントを聴くという講評形式については、学生、教員両者にとって少し戸惑いもあったようである。けれど、参加した中国側の学生のほとんどが意見の中で触れていたことから、実際にやってみた上では、好意的なコメントが示されていた。このことから、この領域横断的な講評会の特徴である「様々な視点からの作品コメント」は、彼らにとって強い関心を引き起こしていたといえる。この新しいアプローチが大きな刺激となり、今までとは違う学びになっていたのである。ただ残念なことではあるが、いままでの慣習で自分の作品批評が終わると会場を後にする学生の姿も多少であるがあった。この事から、今後は学びの空間であるこの講評会場において、このような講評について未経験の参加者に対しても積極的にお互いから学ぶことのできるよう、意識を深めてゆく仕組み自体も必要であると感じた。



講評会の様子



作品搬入に関して、2008年の北京オリンピックを契機に、中国国内で販売目的の輸入美術作品の通関手続きが厳格になったため、2008年以前のように中国国内に作品を持ち込む事が出来なくなった。このため、学術交流目的の美術作品の入国審査等の手続きにかなりの時間が必要となり、発送時点では想定していない様々な手続きが必要となっていた。このため、急遽美術学院の担当教授と事務スタッフ、日本の多摩美から来た国際交流部のメンバーと一緒に北京市文化局に出向く

等々、あらゆるアプローチを経て現地に作品を持ち込む事が出来た。今後も国際的な教育プログラムの実施はますます盛んになると考えられるが、社会制度が違う国外での実施については、プログラム内容だけでなく、事前の諸手続きに今まで以上の十分な時間的配慮をする事が必要である。

以上